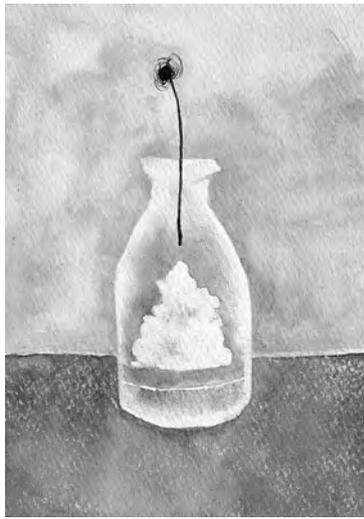


人生のハンドルの自分が握っている

県高等学校体育連盟 会長
(県立岡山御津高等学校 校長)

神 田 亮 一



私たちは、経験に基づく予測と実体験でしか生徒に伝えることができないわけだが、コロナ禍の世の中では、どちらも通用しない。大人も経験のない未来に対して、一体生徒に何を語りかけていけばいいのだろうか、と考えてしまう。

極端な話になるが、そもそも毎日はずべて未経験なので、世の中や社会がどうであろうと関係なく、基本的に行き当たりばったりである。だから、その時々選択と判断に従うしかない。「人生は至る所で決断や判断を下さなければならず、生きることはその判断の集積であり、決断の連続の結果が今である。結果が善だろうと悪だろうと、それが今後の人生を決めていくだろう。」と、著名人の言葉を借りて日頃から生徒に説き、大切なのは心の置き所である、と強調している。背中を押したり、包容することも大切なのだが、今生徒に伝えるべきは「気構え」だと思っている。

そこで、かなり前になるが、ファーストリテイリング会長の柳井正氏が、朝日新聞の連載コラム『希望を持つとう』で語りかけた記事

から、私の経験と重ね合わせて共感した言葉を二つ紹介したい。

まず、「反発心が現状を突破する」だ。現実に向き合い、避けて通れない問題を、正面からどう突破していくか、真摯に考えることが大切である。そのためにも、事なかれ主義に陥らず、日々の小さな問題から、簡単に納得せず、すぐにイエスと言わない姿勢が肝心だと示唆している。反抗ではなく、反発心を鍛えれば、身の処し方をしっかり決め、自分で行動できる人間になっていくだろう。

次に、「自分に期待しよう」である。苦しくても希望は持てる。希望を持つには、人生は自分が主役だという信念、自分に期待するという姿勢が不可欠だ。自分はこんなことができるのではないかと考え、人より少しでも得意な部分を必死に探し、一生懸命磨く。そうすれば、必ず活路は拓ける、と呼びかけている。

この「気構え」に耐性と復元力を肉付けし、やり抜く力が伸びれば、次代が求める自律型人材に近づくのではないかと思っている。